



Title	春曙文庫蔵源氏物語断簡（帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習）解題と翻刻
Author(s)	飯田，実花；川渕，紗佳
Citation	詞林. 2023, 74, p. 42-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

春曙文庫蔵源氏物語断簡

(帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習)

解題と翻刻

飯田実花・川渕紗佳

はじめに

春曙文庫には、鎌倉後期以前に書写されたと考えられる『源氏物語』帚木巻・藤裏葉巻・橋姫巻・宿木巻・手習巻 計五帖の断簡が存在する(『相愛大学 相愛女子短期大学 図書館蔵 春曙文庫目録(和装本編)』(一九九三年)の春一五七)。

本断簡は田中重太郎氏の旧蔵書であり、相愛学園創立百周年の記念事業の一環として田中氏の蔵書を中心に春曙文庫が設立された際に、春曙文庫の所蔵となったものである。田中氏の蔵書については山本和明氏によって自筆蔵書リストが紹介されており、本断簡は「源氏物語(1)」のなかに、

鎌倉時代書写 断簡(五十丁) 帚木・手習・やどり木・藤のうらは・橋姫 一箱 五万円

と確認できる。また、蔵書リストの末尾には次のような記述が見える。

○『断簡聚影(一)』(仮題)

○五人以上にして将来出版の予定。(昭和四十一年ごろ)
○すべて鎌倉時代以前の写しであること。現在三点として出版・刊行を目指していたなかに、『性霊集』『新古今和歌集』とともに、

スミ 源氏物語 五四丁 百八面 三万五千円・五万五千円

ともある。両者の記述には丁数や購入価格に差が見られるものの、鎌倉時代書写の『源氏物語』断簡という点から考えて、本断簡を指すとみてよい。これらの記述から田中氏がこの断簡を購入・所蔵していたことが知られるが、どこから購入したのか、田中氏以前の所蔵先は不明である。田中氏はこれを購入したのち、この断簡について、古典文庫の吉田幸一氏に相談したらしく、春曙文庫には、『源氏物語』断簡とともに、吉田氏から田中氏に宛てた、次の手紙が保存されている。

御芳書并に小包到着ご安心ください。

一、源氏断簡はたしかにすばらしい。筆跡から見て鎌倉

中期以前と見てよいでせう。寄合書の断簡ですから筆者は不明としても随分違筆です。他に似てゐる筆跡はありますが、この類のものはすべて筆者を知ることではできません。

折角ですから製本することもどうかと思ひますし、やはり桐箱に入れるより他ありません。

二月廿二日

田中御侍史

吉田幸一

以上のとおり、吉田氏も本断簡を鎌倉中期書写と判断していたらしい。田中氏と吉田氏の交流については既に報告されているところであるが、本断簡を巡る書簡の存在も、両者の交流の一端を示しているよう。

なお、『〇断簡聚影(一)』(仮題)に「スミ」とあるのは、田中重太郎編著『源氏物語断簡』(東風社、一九六四年)という複製本が個別で刊行されたことを意味するらしく、この複製本はコロタイプ印刷による複製に、解題と帚木巻の釈文が付されている(以下、田中氏による本断簡への言及を引用する際は、すべて当該解題による)。ただし、この複製本が現在入手困難な状況にあることは柿谷雄三氏も指摘するところであり、それゆえに柿谷氏によって藤裏葉巻と橋姫巻前半の翻刻がなされた。⁽³⁾また現在は国書データベースにてカラー画像が公開されており、⁽⁴⁾閲覧も容易になった。加えて、

本断簡のうち少なくとも帚木を除く四帖については、ツレ・僚巻も多数報告されており、詳細は池尾和也氏によつてまとめられているため割愛するが、ハーバード大学美術館蔵の須磨巻・蜻蛉巻(いずれも完本)、国立歴史民俗博物館蔵の中山本蛤虫巻(残欠本)、石水博物館蔵の早蕨巻(残欠本)のほか、宿木巻に三葉の断簡(それぞれ宮内庁保管古筆手鑑所収、鶴見大学図書館蔵、池尾和也氏蔵)が存在する。

以上のように春曙文庫本の周辺資料が徐々に明らかになりつつある一方で、春曙文庫本の橋姫巻後半以降は未だに翻刻されておらず、校異の全容や本文の位置づけも明らかにされていない。そこで本稿では、あらためて書誌情報を確認したうえで、各帖における本文の特徴を具体的に述べ、春曙文庫本の位置づけを試みる。また、未翻刻の橋姫巻後半・宿木巻・手習巻とともに、閲覧の困難な帚木巻についても、田中氏による誤りも考慮し、あらためて掲載する。なお、校異一覧については次号に掲載する予定である。

一、書誌情報

先述した通り『源氏物語』断簡は、帚木巻・藤裏葉巻・橋姫巻・宿木巻・手習巻の計五帖のうち、帚木巻十丁、藤裏葉巻十二丁、橋姫巻二十丁、宿木巻十二丁、手習巻十二丁の、計六十六丁が現存する。元々は列帖装であつたらしく、各帖それぞれ四つの綴じ糸を通すための穴が確認できる。表紙も

なく、各帖のなかでも脱丁・脱落部分が見える。各帖の寸法は次の通りである(縦×横)。

帚木巻 ……十六・五 cm × 十五・九 cm

藤裏葉巻 ……十六・五 cm × 十五・六 cm

橋姫巻 ……十六・五 cm × 十五・六 cm

宿木巻 ……十六・〇 cm × 十五・五 cm

手習巻 ……十六・六 cm × 十五・〇 cm

縦幅については、宿木巻が他の帖と比較して約〇・五 cm 程度小さい。横幅については、帚木巻が最も大きく、手習巻が最も小さい。その差は約一 cm ほどである。

料紙は、先行研究では斐紙(雁皮紙)と指摘している。料紙が薄い点や質感から斐紙ともいえそうである(特に藤裏葉巻の料紙についてはこの二点の特徴が確認できる)。しかし、帚木巻の料紙がやや厚いことや、橋姫巻・手習巻の料紙には丁によっては繊維が一部偏って固まっている様子が確認できる。したがって、楮紙打紙の可能性も否定できない。

各帖、全て一面十行書である。字高については次の通りである(縦×横)。

帚木巻 ……十四・五 cm × 十三・五 cm

藤裏葉巻 ……十四・七 cm × 十三・五 cm

橋姫巻 ……十四・八 cm × 十四・〇 cm

宿木巻 ……十四・六 cm × 十四・二 cm

手習巻 ……十四・七 cm × 十三・五 cm

それぞれの帖の字高を比較すると、最大で縦〇・三 cm、横〇・七 cm ほどの差が見られる。一行の文字数については、十四字から二〇字程度とかなり差がある。特に帚木巻は丁によって一行の文字数の差が大きい。筆跡は似通っており同一筆者と考えられる。筆跡から五帖それぞれの筆者は異なるが、各帖は一人の人物が担当したようである。

和歌の書式について、田中氏は「和歌は 改行して、下の句から本文につづいてゐる」としており、たしかに帚木・藤裏葉・橋姫・手習巻では改行して一〜三字下げで書き始め、成り行きで改行し、二行目は行頭から始めて、そのままの文が続く。しかし宿木巻は改行して二字下げで書き始め、上の句で改行して、二行目も二字下げで下の句を書き、次の行の行頭から地の文を書いている。断簡五帖は巻ごとに別の人物による書写であるため、書写者による差異かと考えられる。

帚木巻以外の四帖には、一部に花・鳥・紅葉・月・雲などの型紙をおき、その上から代楮粉を撒き散らした装飾が成されている。装飾が成された丁を具体的に示すと、藤裏葉巻は一丁裏・六丁裏・七丁表・十二丁表、橋姫巻は一丁裏・四丁裏・五丁表・八丁表・十一丁裏・十四丁裏・十五丁表・十八丁表、宿木巻は六丁裏・七丁表、手習巻は四丁裏・七丁表・十一丁裏・十二丁表である。装飾が行われている丁は、列帖装を解いた際に見開きの状態になる部分、つまりもともと同一紙の片面であるという特徴がある。これらの装飾は、文

字の上から代赭粉が散らしてあることから、書写の後に行われたと考えられる（手習卷十一丁裏・十二丁表にはこの特徴が顕著に見える）。また、橋姫巻では、文字の上から代赭粉を散らし、その後に本文訂正のために、上からなぞり書きをした痕跡が見られる（橋姫巻十八丁表五行目「はへらす」の部分参照）。したがって、まず、列帖装に装丁されていた状態のものに『源氏物語』の書写を行い、その後、装丁を解いて代赭粉を散らす装飾を行ってから装丁しなおしたという工程が想定できる。本文訂正については、いづころ行われたか明瞭ではないが、本文書写と本文訂正の筆跡が同一人物によるものと考えても問題なさそうである。これを踏まえると、本文の書写年代と代赭粉による装飾の時期は隔たっていないと考えられる。

二、各帖の本文の特徴と内容

本節では、『源氏物語』断簡の各帖を取り上げ、その本文の特徴と内容について述べる。

二一、帚木巻

帚木巻は、大きく二つに分けられる。一つ目は、「てねたるへき中将のきみは……」から「……さたまらぬありしなからにてかゝる御」までの前半部五丁分である。『源氏物語大成』では、六八ページ6行目から七一ページ7行目に相当する（以

下、二一ではこの前半部をⅠとする）。二つ目は、「ほとにみへ給へるみにしむはかりに……」から「……とさまかうさまにおほしくらす」までの後半部五丁分である。『源氏物語大成』では、七二ページ13行目から七六ページ7行目に相当する（以下、二一ではこの後半部をⅡとする）。脱落部分の文字数が約七三〇〜七四〇字程度と想定できる。Ⅰの末部である五丁裏が一六七字、Ⅱの始めにあたる六丁表が一九三字であることから、一丁は約三三六〇字程度であらう。したがって、脱落部分は約二丁分に相当し、一括にした際に一番内側にあった一紙が脱落したと考えられる。帚木巻の本文について、田中氏は次のように述べる。

ははきぎ は、青表紙系統本文でなく、河内本系統の本文でもない。いはゆる別本・古本の本文になるのであるが、大成本所収の別本には、この断簡類似の本文のものがない。かなづかひの誤や写し誤がきはめて多いが、代名詞の「いづこ」が「いどこ」になつてゐたりして、本文開拓に興味ある本文である。

この指摘を踏まえて、『源氏物語大成』および「源氏物語校異集成（稿）」（以下、「校異集成（稿）」で公開されているデータを用いて異同を確認した。なお、掲出した異同の数は文節ではなく、『源氏物語大成』および「校異集成（稿）」による校異一条をそのまま反映した数である（以下、本稿での異同の採用方針は全て同じ）。結果は次の通りである。

表1 帚木巻

独自異文	258	81%
陽と共通	29 (10)	9% (3%)
国と共通	41 (15)	13%(5%)
各と共通	15 (1)	5% (0)
穂と共通	18 (6)	6% (2%)
異同総数	318	

※ () 内の数字と%は、春曙文庫本と該当本文のみに共通する注記の数と割合である。

※小数点以下は四捨五入。以下、本稿では全て同じ。

表1で示したとおり、春曙文庫本栄帚木巻と『源氏物語大成』との間には、三一八箇所(の異同が存在する(音便や仮名遣いによる異同を除く)。そのうち、二五八箇所は春曙文庫本のみの独自異文で、全体の約八十一%にあたる。校合本の^中では、国冬本との一致率が最も高く、四一箇所、十三%(ただし、春曙文庫本と国冬文庫本の二本のみ共通するのは五%)だが、圧倒的に春曙文庫本の独自異文が多いと言える。

以下、特に重要と考えられる異同を取り上げて、春曙文庫本と『源氏物語大成』本文、別本の異同を示しながら確認する。

まず、春曙文庫本の独自異文を取り上げる。二五八箇所の中には、あきらかに誤字・脱字によると考えられるような例もあるが、大きく他本と異なる表現が複数確認できる。次に

示すのは、光源氏が空蟬の寝所に押し入る場面である。

・春曙文庫本本文(二丁表〜二丁裏)

かゝるおりをまちいてたるもさらにあさうはあらしとおもひなし給へといとやはらかにておにかみもあらた、すましきけはゐなれははしたなうあさましうこゝにはさへき人もはへらすなとたかへにこそはへめれといふもいきのしたなり

・『源氏物語大成』本文(六九ページ2行目〜6行目)

かゝるおりをまちいてたるもさらにあさくはあらしとおもひなし給へといとやはらかにの給ひておに神もあらたつましきけはひなれははしたなくこゝに人ともえの、しらす心ちはたわひしくあるましきこと、おもへはあさましく人たかへにこそ待めれといふもいきのしたなり

・傍線部の校異

0060-04 はしたなく―はしたなうあさましう春

0060-04 こゝに―こゝにはさへき春

0060-04 ともえの、しらす心ちはたわひしくあるましきこと、おもへはあさましく―もはへらすなと春

0060-04 心ちはた―心地はたいと陽―心地はた、国

0060-05 わひしく―わひしう陽

0060-05 あるましき―あさましき陽

0060-05 おもへは―おほえは各

0069-05 あさまし〜あさましう陽国穂―ナシ各

0069-05 侍めれー侍らめ陽ー侍れ国

ここで確認したいのは、傍線部の表現である。校異を見れば明らかであるように、春曙文庫本は独自異文を持っている。『源氏物語大成』で確認できる「ともえの、しらす心ちはたわひしくあるましきこと、おもへは」に相当する部分はなく、空蟬の心情は「はしたなうあさましう」と示されるのみである。また、空蟬の発言も他本では「人たかへにこそ侍めれ」のみであるが、春曙文庫本では「こ、にはさへき人もはへらすなとたかへにこそはへめれ」と発言が増えている。このように、物語の大筋に変化を及ぼすほどではないが、他本のどの本文とも共通しない表現を持つ場面が散見される。

先述した通り、今回の調査で校合した伝本の中では、国冬本との一致率が最も高い。完全に一致しているとは言えないが、国冬本と非常に近い表現を持つ部分も確認できる。次に示すのは、光源氏が小君を使って、空蟬に文を届けさせようとする場面である。

・春曙文庫本本文（七丁裏〜八丁表）

あねきみの御ことのいとくはしうとひ給へはわらは心ちにさるへきふし〜はいくゑきこゑ給いとはつ

かしけれはうちいてにく、おほさるれとよくかたらひたまひて御ふみかき給あやしとおもふにこま〜とみ、にあて、いひしらせ給

・国冬本本文

いもうとの君のこともくはしうとひきこへなとしてはつかしけにしつまりたれはうちいてにく、おほせといとようかたらひ給ふ御ふみたまえりいとあやしうおもへるにこま〜とみ、にあて、いひしらせ給ふ

・『源氏物語大成』本文（七四ページ4行目〜6行目）

いもうとの君の事もくはしくとひ給ふさるへきことはいらへきこえなとしてはつかしけにしつまりたれはうちいてにくしされといとよくいひしらせ給

・掲出部の校異

0074-04 いもうとの君の事も―あねきみの御ことの春

0074-05 くはしく〜くはしう国―いとくはしく穂―い

とくはしう春

0074-05 とひーとひき、各

0074-05 給ふさるへきことはいらへーナシ国

0074-05 給ふさるへきことはいらへきこえなとして―

給へはわらは心ちにさるへきふし〜はいくゑきこゑ給春

0074-05 はつかしけに―いとはつかしければ春

0074-05 しつまりたれは―ナシ春

0074-06 うちいてにくしされと―うちいてにく、おほ

せと陽国―うちいてにく、おほさるれと春

0074-06 よく〜ようかたらひ給ふ御ふみたまえりいと

あやしうおもへるにこま／＼とみ、にあて、
 国―よくかたらひたまひて御ふみかき給あや
 しとおもふにこま／＼とみ、にあて、春

この部分で特に確認したいのは、傍線部の表現である。『源氏物語大成』で確認できる「よくいひしらせ給」では光源氏が小君に丁寧に言い聞かせたという情報のみが読み取れる。一方、春曙文庫本の本文だと、光源氏は小君に語り聞かせ、空蟬宛ての手紙を書いたとする。それだけでなく、小君が不可解に感じたことについても、光源氏は細かく耳に口を寄せて語り聞かせたとある。この情報については、若干表記・表現は異なるが国冬本でも同じ表現・内容を読み取ることができる。つまり、他の多くの諸本の本文よりも、詳細な情報を春曙文庫本・国冬本では得られる。他の諸本では、光源氏が文を書く場面が語られない。春曙文庫本・国冬本では、この後小君が文を持って空蟬のもとに行く場面と話が通じやすい表現になっていると言えるだろう。

以上のように、春曙文庫本・帚木巻の本文は、独自異文が非常に多いことと、他の別本と比較した結果、国冬本との一致率が高く、近い表現を有するものがあることを示した。

詳細については後述するが、藤裏葉巻・宿木巻・手習巻の本文については陽明文庫本と非常に近い関係にある。これは僚巻の諸本についても同様である。しかし、帚木巻については、陽明文庫との近似性は確認できない。これは、親本が

帚木巻のみ陽明文庫本とは異なるものを採用したと見ることもできる。一方、この帚木巻断簡の寸法が藤裏葉巻・橘姫巻・宿木巻・手習巻の断簡と似通っていたため、僚巻と判断していたが、そもそも僚巻ではなかった可能性も考えられる。これまで、僚巻か否かの判定は大きさと代赭粉による装飾によつて判断されており、帚木巻については、大きさがほぼ同じ程度であるため、僚巻と考えられていた。しかし、本文の特徴が大きく異なる以上、僚巻であるという前提に疑問が生じる結果となった。

二―二、藤裏葉巻

藤裏葉巻は全十二丁、『源氏物語大成』一〇〇三頁一行目「なみる人からや色もますらん……」から一〇二頁九行目「ひるなのやうなる御有さまをゆめの心ちして」までの部分が存在する。十二丁＝六紙ということで、ハーバード大学美術館蔵「須磨」「蜻蛉」の列帖の一綴がおおよそ六紙であったことから、列帖の一綴のみが現存していると考えられよう。藤裏葉巻の本文について、田中氏は次のように述べる。

つぎに、ふじのうらば は、青表紙本に似たところもあるが、まづ別本系統の本文とみるべきものであらう。大成に校合せられてゐる諸本では陽明文庫本の独自異文と一致するところがある。これまた別本系統の本文とみるべきであらう。

表2 藤裏葉卷

ア	陽と共通	80	69%
ア①	陽春+他別本	50	43%
ア②	陽春のみ	30	26%
イ	陽と共通しない	36	31%
イ①	春+他別本	13	11%
イ②	春のみ	23	20%
合計		116	

※表中の「他別本」は、「校異集成（稿）」において藤裏葉巻で採用されている保・国・麦・阿・玉のいずれかの伝本と共通することを意味する。

するとおり、特に陽明文庫本との関係が問題となると考えられることから、陽明文庫本を中心にまとめた。

表2に示したとおり、春曙文庫本藤裏葉巻と『源氏物語大成』との間には、一一六箇所^①の異同が存在する（音便や仮名遣いによる異同は除く）。そのうち八〇箇所は陽明文庫本と共通しており（ア）、そのなかでも三〇箇所については、『源氏物語大成』および「校異集成（稿）」に採用された伝本のなかで、陽明文庫本と春曙文庫本のみに共通して見られる異

陽明文庫本との近さが指摘されており、別本群に位置づけられている。こうした状況に鑑み、『源氏物語大成』本文と校合を行い、「校異集成（稿）」を用いて別本の校異を確認した。その結果を示したのが表2である。なお、田中が指摘

同であった（ア②）。一方、陽明文庫本とは共通しない異同三六箇所（イ）のうち、二三箇所は春曙文庫本にのみ確認できる異文であった（イ②）。なお、陽明文庫本において春曙文庫本と共通しない異同は二一箇所である。以上のことから、現在報告されている別本の本文のなかでも春曙文庫本と陽明文庫本の相対的な近さが確認できよう。以下、特に重要と考えられる異同について、春曙文庫本・陽明文庫本・『源氏物語大成』本文を並置して確認しておく。

まず、柏木が夕霧を雲居雁のもとへ導く場面である。

・春曙文庫本（藤裏葉・二丁オ）

中将はなのかけのたひねよいかにそやくるしきしるへに
そはへるやとのたまへはまつに契れるはあたなるはなか
はゆ、しやはとてせめ給中将は心のうちにねたのわざや
と思所あれと人さまのおもふさまにめてたきにかうもあ
りはてなむとこゝろよせわたる事なれはうしろやすく道
ひきつ

・陽明文庫本（藤裏葉・一二ウ）

中将花のかけのたひねよいかにそやくるしきしるへにそ
侍やとの給へは松にちきれるはあたなるはなかはゆ、し
やはとてせめたまふ中将は心のうちにねたのわざやお
もふところあれと人さまのおもふさまにめてたきにかう
もありはてなんに心よせわたることなれはうしろやすく
みちひきつ

・『源氏物語大成』本文(一〇〇三頁12行目～一〇〇四頁1行目)

中将はなのかけの旅ねよいかにそやくるしきしるへにそ侍やといへは松にちきれるはあたる花かはゆ、しやとせめ給中将は心のうちにねたのわさやとおもふところあれと人さまのおもふさまにめてたきにかうもありはてなむと心よせわたることなればうしろやすくみちひきつ

二重傍線部、春曙文庫本および陽明文庫本において「とのたま(給)へば」となっている箇所が、大成本文では「といへは」となっており、春曙文庫本と陽明文庫本のみが柏木への敬意を示している。同様の異同は河内本系統・定家本系統の諸本に確認できず、別本群にもない。

この場面、大成本文では夕霧に対しては「せめ給」と敬語が用いられているのに対し、柏木に対しては「いへは」「とおもふところあれと」「と心よせわたることなれば」「みちひきつ」と、いずれも敬語が用いられていない。こうした一貫性を認めるならば、春曙文庫本と陽明文庫本が柏木の言動を「のたまふ」とするのは不自然であろう。ただし、藤裏葉巻のなかでは、「御ともにこそとの給へは」(『源氏物語大成一〇〇三頁1～2行目)と柏木に対して敬語が用いられることもあるため、一概に「のたまへは」とする本文を否定することはできない。「とのたまへは」と「といへは」は単純な誤写の想定が難しく、なんらかの解釈によって本文が分か

れていた可能性がある。

また、傍線部に着目すると、大成本文が「ゆ、しやと」となっているのに対し、春曙文庫本と陽明文庫本は「ゆ、しやはとて」となっている。この部分は、定家本系統の御・横・池・三および河内本系統の宮・尾・青・平・大・鳳・岩、別本の麦・阿において「ゆ、しやとて」となっており、「とて」の部分は太島本以外の伝本と一致することになる。しかし、「ゆ、しやは」と係助詞「は」が付くのは春曙文庫本と陽明文庫本のみである。「やは」は反語となるが、ここでは「不吉だろうか、いやそうではない」となり、文脈上不自然である。直前の「はなかは」につられて「やは」となってしまうのだろうか。

このほか、雲居雁への後朝の文に対して大成本文は「いとなれかほなり」(一〇〇五頁5～6行目)とされているが、春曙文庫本・陽明文庫本のみ「いとなれかほにかき給へるを」(春四丁オ／陽一四ウ)とある。文意は変わらないが、単純に生じる異同ではないことから、陽明文庫本と春曙文庫本が祖本を同じくする可能性が指摘できよう。

最後に、藤裏葉巻の書き入れについて見ておく。春曙文庫本に存在する傍記は、基本的に書写のさいに生じた誤脱を訂正する類のものであるが、藤裏葉巻には次のような注記が見える。

即月八日事也
くわむちふつ (藤裏葉・六丁オ)

これは「灌仏」が旧暦四月八日に行われたことを意味しており、本文ではなく解釈に関わるものである。同種の注記は春曙文庫本ではほかに見いだされないが、僚巻であるハーバード大学美術館蔵須磨巻では、

・三月廿^{金也}よ日（須磨・3ウ）

・せむ^秋しやう（須磨・60ウ）

のように、「^⑩」というかたちで本文の内容を補う注記が付されている。一部のなじみが薄い語彙については、誤読を避けるために解釈に関わる注記が付されたと考えられる。

二―三、橋姫巻

橋姫巻は、大きく二つに分けられる。一つ目は、「してほとふる時はこひしくおほえ給……」から「……かせのふきつるを思かけぬ」までの八丁である。『源氏物語大成』では、一五一九ページ10行目から一五二四ページ8行目に相当する（以下、二―三ではⅠとする）。二つ目は「もてなひ給はんも中くうたてあらむ……」から「……かならずまいるへければかた／＼いとまなく侍をまたこの」までの十二丁である。

『源氏物語大成』では、一五三二ページ13行目から一五四一ページ2行目に相当する（以下、二―三ではⅡとする）。Ⅰの部分については一綴の外側の一紙もしくは二紙が脱落したと考えられる。橋姫巻の本文について、田中氏は次のように述べる。

表3 橋姫巻

独自異文	183	66%
高と共通	57 (1)	21% (0)
横と共通	42 (13)	15%(5%)
保と共通	51 (10)	18%(4%)
国と共通	55 (1)	20% (0)
麦と共通	39 (6)	14%(2%)
異同総数	277	

本の一本としての価値を認める程度の本文である。

この指摘を踏まえて、『源氏物語大成』および「源氏物語校異集成（稿）」で公開されているデータを用いて異同を確認した。結果は次の通りである。

表3で示したとおり、春曙文庫橋姫巻と『源氏物語大成』との間には、二七七箇所^⑪の異同がある（音便や仮名遣いによるものを除く）。そのうち、一八三個所は春曙文庫本のみの独自異文で、全体の約六六％にあたる。校合本の中では、一致率が高い順に、高松宮家本が五七箇所^⑫で約二一％、国冬本が五五箇所^⑬で約二〇％、保坂本が五一箇所^⑭で約一八％である。いずれにしても、藤裏葉巻本文と陽明文庫本のように高い割合で異同が一致する伝本は見受けられない。

先述した通り、春曙文庫蔵『源氏物語』断簡の藤裏葉巻の

はしひめ の本文も、青表紙本でなく、河内本でなく、別本系統に属するやうである。ただし、おなじ別本系統といつても、この巻の本文は、大成本の別本系統独自異文と一致するところがあり、その系統

本文は陽明文庫本と近い関係にあった。ただし、本巻では、陽明文庫本橋姫巻は校合本として採用しなかった。その理由としては、陽明文庫本が次のような特徴を有することが山本利達氏によって指摘されているからである。

第一綴の部分、すなわち本文一〇丁までが別本で、第二綴以下は青表紙本による補写である。第一の料紙は、夕霧や幻巻の料紙と同じで、第一巻の解説に堅楮紙とされたものである。第二綴以下は斐紙である。

陽明文庫本の第一綴の部分と、本断簡で確認できる部分は一致しない。また、本断簡で確認できる本文は、陽明文庫本が補写する前の本文と近い可能性もあるが、判断は難しい。以上の点を踏まえて、橋姫巻の特に重要と考えられる異同を取り上げて、春曙文庫本と『源氏物語大成』、別本の異同を示しながら確認する。春曙文庫本と高い割合で異同が一致する伝本は見受けられないが、帚木巻ほど春曙文庫本の本文が孤立した状態にあるとも言いがたい。例えば、

1530-11 おほされけり―おほえたまふ高横保国麦春

1529-10 こまやかに―まめやかに高横保国麦春

1523-14 なこやかに―のとやかに高横保国麦春

1531-06 心うつるましき―心ゆるさぬ高横保国麦春

のように、校合した本すべての本と一致する表現も見られる。これらの異同を確認すると場面の大筋や大意には影響を及ぼさないものの、明らかに異なる語彙を用いて表現しているこ

とが確認できる。春曙文庫本をはじめとする別本の表現がより場面に即した表現と考えられるものもある。

・春曙文庫本文(十一丁裏―十二丁表)

十月になりて五六日程にうちへまうて給ふあしろをこそこのころは御らんせめときこゆる人くあれと何かそのひをんしにあらそふ身にてあしろにもよらむとそき、すてたまふてれいのしのひやかにていてたちたもかひて・『源氏物語大成』本文(一五三五ページ1行目―3行目)

十月になりて五六日のほとにうちへまうてたまふあしろをこそこの比は御らむせめときこゆる人くあれとなにかそのひをむしにあらそふ身にてあしろにもよらむとそきすて給てれいのいとしのひやかにいてたち給

・傍線部部の校異

1535-02 あらそふ心にて―あらそふ身にて高横保国麦春

―あらそひて横

薫が十月の始めに宇治を訪ねる。そこで、冬の宇治の風物詩である網代の見物を勧められるが、断る場面である。ここでの薫の断りの言葉に異同が生じている。青表紙本・河内本の諸本では『源氏物語大成』で見られる「ひをむしにあらそふ心にて」とし、春曙文庫本では「ひをんしにあらそふ身にて」とする。「ひをむし(ひをんし)」とは、朝に生まれ夕方には死ぬといわれる虫で、はかないものの例えとしても用いられる¹²⁾。したがって、薫は自身をひおむしのようににはかない

ものであることを理由として、網代見物を断っているのである。ここでは「はかなさをあらそふ心」よりも「はかなさをあらそふ身」のほうがより、薫の発言と合うと考えてよいだろう。

以上のことから、橘姫巻も別本に分類される本文であることが確認できた。陽明文庫本橘姫巻の大部分が補写であるため、藤裏葉巻のような検討は行うことができなかったが、他の別本にも見られる異同を含むことを示した。それを踏まえて、別本に類される伝本で見られる表現を取り上げて考察を加えた。

二―四、宿木巻

宿木巻は全十二丁で、『源氏物語大成』一七六四頁3行目「みちをふみわけけるあともみえぬを……」から一七七二頁7行目の「けとをくやならんまた宮の御心」までが存在する。十二丁六紙であり、列帖の一綴のみが現存していると考えられる。宿木巻の本文について、田中重太郎は次のように述べる。

やどりぎの本文は、別本系統で、大成所収本では、陽明文庫本の本文に一致するところがある。

また宿木巻には三葉の断簡が確認されており、池尾和也氏はこれを「丁子吹き料紙本「宿木」と称し、『源氏物語別本集成』⁽³⁾（以下、『別本集成』）を用いた本断簡も含む校異の一

覧を示している。池尾氏は校異をふまえ、「丁子吹き料紙本「宿木」と陽明文庫本の関係について、互いの独自異文の多さから「両本が直接の書承関係にない」ことを認めつつ、「陽明文庫本と極めて近い（同一の祖本を持つ）関係にあることは容易に理解できよう」と指摘する。また、丁子吹き料紙本の価値について、次のように述べる。

陽明文庫本のように同一系統の伝本をほかに持たない単独本では、その独自異文が親本や祖本に由来するものか、それとも単なる不注意に起因するものかを峻別することは極めて困難であったが、少なくとも丁子吹き料紙本との比較が可能な部分においては、ある程度それが可能となると考えられる（少なくとも共通する異同は祖本に由来するものであり、それ以外の異同とは分けて考えることができる）。すなわち、同じく鎌倉中期書写の両本を用いることによって、その元となった祖本への遡行が見通せることになる。

陽明文庫本との近似と、その価値が示されている。異同の全容については池尾氏の論考に詳しいため本稿では省略するが、以下の異同は、まさに池尾氏の言うように「祖本に由来する」と考えられる脱文である。

・春曙文庫本（宿木・10ウ・11オ）

からうしてそのあかつきおとこにてむまれ給へりけるを宮もかひありておほしたり大将殿もよへおはしましたり

しかしこまりにやかてこの御よろこひもうちそへてたち
なからまいり給へり

・陽明文庫本(宿木・一二二才)

からうしてそのあか月おとこにてむまれ給へりけるを宮
もかひありてうれしくおほしたり大將はもよへおはしま
したりしかしこまりにやかてこの御よろこひもうちそえ
てたちなからまいり給へり

・『源氏物語大成』本文(一七七―一頁2―5行目)

からうしてそのあか月おとこにてむまれ給へるを宮もい
とかひありてうれしくおほしたり大將殿もよろこひにそ
へてうれしくおほすよへおはしましたりしかしこまりに
やかてこの御よろこひも打そへてたちなからまいり給へ
り

それぞれ小異はあるが、注目したいのは二重傍線部である。
現在確認できる諸本のなかで、春曙文庫本と陽明文庫本のみ
が「よろこひにそへてうれしくおほす」の部分の有さない。

この部分は一五文字であり、おおよそ枳形本の一行分の文字
数であること、脱文の一文目と、脱文のあとの一文字目がと
もに「よ」であることから、目移りによる脱文が想定できよ
う。これまでは陽明文庫本のみにこの脱文が確認できたため、
陽明文庫本の不注意とも考えられた。しかし、春曙文庫本と
陽明文庫本にこれが共通して脱している以上、これは両者の
祖本において脱文が生じており、それがそのまま継承された

と考えられる。

二一五、手習巻

手習巻は十二丁分が現存しており、『源氏物語大成』に照
らし合わせると、以下のAとEのようになる。

A 二〇〇一頁12行目「みえつらむとはつかしく……」か
ら二〇〇四頁10行目の「……ゆふきりの宮す所の」ま
で

B 二〇〇五頁7行目「うたよみにしへ思いてつ、
……」から二〇〇六頁12行目の「……山こもりしたる
とふらひに」まで

C 二〇〇七頁8行目「うちわすれはやみ侍らぬを……」
から二〇一〇頁6行目の「……まさり給にけるかなと
をなしくは」まで

D 二〇三八頁12行目「我したらんあやまちのやうに
……」から二〇三九頁9行目の「……まめやかなるさ
まに」まで

E 二〇四二頁7行目「事のみまさりてなん……」から二
〇四三頁2行目の「……いそかさせ侍なんといふをき
くに」まで

このうち、AとCは紙を同じくしている。春曙文庫本手習
巻の半丁の文字数は一六〇―一八〇字程度であり、『源氏物
語大成』に照らし合わせると、AとBの間に三三七字、Bと

Cの間に三四〇字分が空くことから、AとCはもともと列帖の同じ綴じのうち、途中の一紙を脱葉していることがわかる。なお、AとCは五紙であるから、脱葉と考えられる一紙を加えると六紙となり、列帖の一綴であった可能性が高い。

D Eも一紙のみが現存している状態である。間は『源氏物語大成』で一二九四字分であるから、間には二紙あったと想定されよう。

宿木巻の本文について、田中重太郎は次のように述べる。

てならひ の巻の本文は、AとBとは、青表紙本系統の榊原家本、二条家本、肖柏本、三条西家本などに一致するところがあり、Cも同様であるが、やや別本の本文に近いところがある。D Eは別本文と一致するところがあるが、それは青表紙本系統にもおなじ本文があったりして、きめがたい。思ふに、この巻のA B C D Eは、すべておなじ筆者の文字と考へられるから、この巻の本文は、通じて青表紙系統本として処理すべきであらうか。

ほかの巻とは異なり、青表紙本系統に属するとの指摘がある。これをふまえ、手習巻に関しては別本群のほかに、田中の指摘する榊・二・肖・三と、「校異集成（稿）」で新たに採用された伝本のなかで上記の四本と関係が近いと考えられる穂・徹を校合に加えた。その結果について、ほかの巻と同様に陽明文庫本との関係性がわかるよう、A B C D Eに分けて示す。

表4 手習巻

		A		B		C		D		E		合計	
ア	陽と共通	23	59%	11	55%	31	66%	10	63%	8	62%	83	61%
ア①	陽春+他別本	8	20%	5	25%	9	19%	2	13%	2	15%	26	19%
ア②	陽春+他別本+青表紙本	5	12%	2	10%	11	23%	4	25%	3	23%	25	18%
ア③	陽春+青表紙本	1	2%	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1%
ア④	陽春のみ	9	22%	4	20%	11	23%	4	25%	3	23%	31	23%
イ	陽と共通しない	16	41%	9	45%	16	34%	6	38%	5	38%	52	39%
イ①	春+他別本	1	3%	1	5%	1	2%	0	0	1	8%	4	3%
イ②	春+他別本+青表紙本	1	3%	1	5%	2	4%	0	0	0	0	4	3%
イ③	春+青表紙本	4	10%	1	5%	1	2%	0	0	0	0	7	5%
イ④	春のみ	10	26%	6	30%	12	26%	6	38%	4	31%	39	28%
合計		39		20		47		16		13		137	

※表中の「他別本」は、「校異集成（稿）」において手習巻で採用されている高・保・池・国・阿・桃・歴のいずれかの伝本と共通することを意味し、「青表紙本」は校合に採用した榊・二・肖・三・穂・徹のいずれかの伝本と共通することを意味する。

表5 春曙文庫本以外の異同

		A	B	C	D	E	合計
ウ	陽明文庫本の異同	20	8	23	4	1	56
エ	青表紙本の異同	23	14	33	8	14	92
エ①	うち穂久邇文庫蔵本のみの異同	11	7	12	4	5	39
オ	陽青共通の異同	4	2	4	1	0	11

表4に示したとおり、総異同数は一三七箇所、そのうち八三箇所が陽明文庫本と共通しており（ア）、そのなかの三一箇所については陽明文庫本と春曙文庫本にのみ共通して見られる異同であった（ア④）。陽明文庫本とは共通しない異同五二箇所（イ）のうち、三九箇所は春曙文庫本にのみ確認できる異同であった（イ④）。

また、表5には春曙文庫本と共通しない異同をそれぞれがどのくらい有しているかをまとめた。ただし、「青表紙本の異同」は各本の異同の合計であり、諸本による差異が大きい。特に穂久邇文庫蔵本の場合は他本と共通しない異同も多いため、別に項目を立てた（エ①）。

藤裏葉巻・宿木巻と比べると陽明文庫本との一致率はやや低い。これは、春曙文庫本のみがもつ異同が多いことも要因の一つと考え

られる。ただしこうした異同は、

- A 2002-02 うれしうーうれしと春
- B 2005-14 おりくはー折々春
- C 2009-01 さやうのすちはーさやうの事すちは春
- D 2039-02 そむきにけるーそむきける春
- E 2042-13 その御はてのわさーそのはてのわさ春

のように、一字のみの軽微な異同が二三例であるから、とりたてて異なる本文を持つとも判断しがたい。むしろ、次にあげるような、完全には一致しないながら、諸本のなかで陽明文庫本とのみ近い異同こそ注目するべきであろう。

次の場面では、浮舟が入水をはかった経緯について小野の妹尼に問われ、事情を話せないながら人に知られたくないという思いを吐露する。

・春曙文庫本（手習・3オ）

世中にありけりとはいかて人にしられしき、つくる人もあらはいといみしくこそとてなき給

・陽明文庫本（手習・二一オウ）

よのなかにありとはいかて人にしられしき、つくる人もあらはいといみしくこそとてなき給

・『源氏物語大成』（二〇〇三頁8行目）

世中になをありけりといかて人にしられしき、つくる人もあらはいといみしくこそとてなき給

確認した伝本のうち、春曙文庫本と陽明文庫本のみが、「な

を」を有さず、「とは」と接続する。春曙文庫本「ありけり」、陽明文庫本「あり」で完全には一致しないものの、両者の近さが確認できる。

また、次は小野の妹尼の婿中將が訪問に際し、その身分を示す場面である。

・春曙文庫本（手習・6ウ）

あま君のむかしのむこのきみいまは中将にておはしける
か

・陽明文庫本（手習・二五ウ）

あま君のむかしのむこの君いまは中将にておはしける

・『源氏物語大成』（二〇〇六頁11行目）

あま君のむかしのむこの君今は中将にて物し給ける

この例でも、他本が一貫して「ものしたまふ」を基準とする本文を有するのに対し、春曙文庫本・陽明文庫本のみが「おはす」を基準とする本文となっている。春曙文庫本は「くか（が）」と接続する点で陽明文庫本と完全には一致しないが、この二本だけが近いのは確かであろう。また、「物し給ける」と「おはしける」は意味上の差異は小さく、本文理解に大きな影響は与えないだろうが、書写の面から考えると、誤写は想定し難い。以上のような点から、手習巻においても、春曙文庫本と陽明文庫本は系統を同じくするような、比較的近い関係にあると考えられる。

田中はA・Cについて「青表紙本系統の榊原家本、二条家

本、肖柏本、三条西家本などに一致するところがある」とし、DEは「別本本文と一致するところがあるが、それは青表紙本系統にもおなじ本文があつたりして、きめがたい」ために、「通じて青表紙系統本として処理すべきであらうか」とする。しかし、表3によれば、ABCとDEの間に顕著な差は見られない。また、陽明文庫本との一致率もやはり高いことから、積極的に青表紙本系統と認定するのも難しい。DEは本文の量も少ないため、パーセンテージから一概に判断することはできないが、手習巻のみ青表紙本系統であるとするよりも、手習巻は青表紙本系統と別本群の距離が小さいことを確認しておくことが重要なのではないか。

以上のことから、手習巻もやはり、相対的に最も陽明文庫本と近い関係にあると考えられる。

三、おわりに

以上、春曙文庫蔵『源氏物語』断簡（帚木・藤裏葉・橋姫・宿木・手習）の書誌情報と本文の性格について述べた。藤裏葉巻・宿木巻・手習巻の本文については陽明文庫本と近い関係にあるのが特徴で、これは既に指摘されている僚巻とも共通する。陽明文庫本との直接的な書承関係は認められないが、共通の祖本を持つと考えられる。橋姫巻の本文については陽明文庫本との対照はできないが、他の別本でも見られる表現を持つことを指摘した。一方で、帚木巻の本文については独

自異文が多く、国冬本と似通った表現をもつという他の巻の断簡とは大きく異なる特徴を持つことが分かった。この独自異文については、鎌倉期の『源氏物語』本文を検討する上で出現した新たな資料として重要といえるだろう。なお、本文を含めて検討した際、他の四帖とは僚巻ではない可能性もあると述べたが、鎌倉期書写の断簡であることは疑いようがない。

五帖合わせて六十六丁の本断簡の書誌と本文を鎌倉期書写の別本の性格を踏まえながら検討した。鎌倉書写の別本の中には、平安期の姿をとどめる部分が残されているのではないかとされる部分もある。本断簡の本文からより平安期に近い姿に遡及できる可能性も否定できない。

【注】

- (1) 山本和明「蔵書家の夢」(国文学研究資料館紀要第四十七号 文学研究篇、二〇二一年三月)
- (2) 鈴木徳男「春曙文庫の成立」(和歌文学会 令和五年度関西七月例会、二〇二三年七月八日、於相愛大学)
- (3) 柿谷雄三「春曙文庫蔵源氏物語(別本) ふちのうらば翻刻」(『相愛国文』第九号、一九九六年三月、URL: <https://soairepo.nii.ac.jp/records/1546>)。柿谷雄三「春曙文庫蔵源氏物語断簡(別本) はしひめ翻刻(一)」(『相愛国文』第十号、一九九七年三月、URL: <https://soairepo.nii.ac.jp/records/1551>)。

- (4) DOI: <https://doi.org/10.20730/100386667>
- (5) 池尾和也『源氏物語』丁子吹き料紙本「宿木」の性格―架蔵、伝源三位頼政筆六半切の紹介を兼ねて―(『女子大国文』第一七三号、二〇二三年九月)
- (6) 佐々木孝浩「飯沼山圓福寺蔵 源氏物語「まほろし」帖―解題・影印・翻刻―」(『斯道文庫論集』第五三輯、二〇一九年一月)は、当該帖の料紙が従来鳥の子紙とされてきたのに対し、デジタル・マイクロ・スコープでの観察により「楮紙を徹底的に叩いて、鳥の子紙に紙質を近づけた打紙」であったことを確認したうえで、「これまで鳥の子紙と指摘されてきた鎌倉時代の写本は、その殆どが打紙を用いていると考えてよさそうである」と指摘している。
- (7) https://www2.kansai-u.ac.jp/ok_matsu/betu.html
- (8) 上野英二「ハーバード大学美術館蔵源氏物語須磨巻・蜻蛉巻について(乾)―付 翻刻須磨巻―」(『成誠国文学論集』第二十五輯、一九九七年三月)によれば「六紙一括、四括」だが、大内英範「ハーバード大学美術館本蜻蛉巻とその本文」(『源氏物語鎌倉期本文の研究』おうふう、二〇一〇年。初出は二〇〇七年)によると、二冊とも六括で、原則として一括六紙だが、須磨の第六括は五紙、蜻蛉の第五括は七紙であるらしい。
- (9) 陽明文庫本の本文は、陽明文庫編『陽明叢書国書篇』第十六輯 源氏物語 九・十四・十六(思文閣出版、一九八一―一九八二年)による。ただし、漢字は通行する字体に改めた。
- (10) ハーバード大学美術館蔵「須磨」の本文は、注8上野氏の翻刻による。
- (11) 陽明文庫編『陽明叢書国書篇第十六輯源氏物語十三』解説(思文閣出版、一九八二年)。

- (12) 『箋注倭名類聚抄（十卷本）』卷八に「蛸唐韻云蛸（音誘漢語抄云比乎牟之）朝生暮死虫名也」とある。
- (13) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第十三卷「早蕨（宿木）」（おうふう、二〇〇一年十月）。
- (14) 注5池尾論。

春曙文庫蔵源氏物語断簡

(帚木・橋姫後半・宿木・手習) 翻刻

【凡例】

- 一、春曙文庫蔵源氏物語断簡(春一五七)のうち、帚木・橋姫後半・宿木・手習を翻刻した。
- 一、各巻の冒頭には「**帚木**」として巻名を示した。
- 一、巻途中の落丁・欠損箇所については点線で示した。
- 一、翻刻に際して、文字は通行の字体に改めた。
- 一、改行は、底本の改行をそのまま反映した。
- 一、丁移りの際には、行末に「」を付し、巻毎の丁数・表裏を示した。また、() 内に『源氏物語大成』の頁数・行数を示した。
- 一、翻刻に際しては、底本が国書データベースで公開されている状況に鑑み、底本を再現するのではなく、以下の記号を用いた。
 - ・取り消し線 見せ消し訂正
 - ・―― 補入記号なしの傍書
 - ・〈 〉 補入記号ありの傍書

【帚木】

おわけいり給てけはゐするほとに
より給へれはいとさ、やかにてふし
たりひはほのくらきになまわつ
らはしけれとうへなるきぬをお
しやり給におんなはた、よひつ
る人とおもひけりいとしのひて中将
めしつれは人しれぬおもひのしるし
ある心ちしてといふをとかうも
おもひわかれすものにおそはる、
こ、ちしてや、とおひゆれはとかほに

「1オ

(六八頁10行目～14行目)

てねたるへき中将のきみはいとこに
そ人けとおかき心ちして物むつかし
きひとふなれはなけしのしもに
人／＼ふしていとふなりしもになんゆき
をりてたゝいまなんまうのほらん

とはへりつといふみなしつまりぬるけ
はゐなれはかけかねおはなちて心み
にひきみれはあなたよりかさゝりけ
りき丁をさうしくちにさしてから
うつたへ物をきてみたりかはしき

「1ウ

(六八頁6行目～10行目)

はへめれといふもいふもいきのした
なりきえまとへるけしきいとこ
こしらうたけなれはおかしうお
ほさるたかうへうもあらぬ心の
しるへなるをおもはずにもおほ
めい給めるかなすきかましうは
みえたてまつらしおもふことみえ
てすこしきこゆへきとていとさゝ
やかなれはかきいたきてさうし
のうちいれ給にあやしくぞも

「2オ

(六九頁5行目～9行目)

そてのさはりておともきこえす
うちつけにふかゝらぬ心とおほさん
もことはりなれとしころおもひわ
たる心のうちもきこえしらせんとて
かゝるおりをまちいてたるもさらに
あさうはあらしとおもひなし給へ
といとやはらかにておにかみもあら
たゝすましきけはゐなれははし
たなうあさましうこゝにはさへき
人もはへらすなとたかへにこそ

「2ウ

(六八頁14行目～六九頁5行目)

ひきたれととかなくておくなるを
ましにふし給ぬさうしひきた
てゝ御むかへにおものとれよとの給へは
女きみ心あはせてかゝるとしもやと
ひとのおもふらんとわりなくおもふに
なかれぬはかりにあせになりていと
なやましけにさへみゆいとこより
はかりいて給ことにぞあらんとしころ
もすこしつへうあなかなかなる
まにて物をのたまひつくすへ

「3オ

(六九頁13行目～七〇頁3行目)

ちよりたれとめつる中将めく物
きたるきたるやゝとのひにあやし
くてたちよりたれはにほゐきて
かほにもかゝるこゝちすれはおもひ
よりぬあさましやこはいかなること
そとおもひさわかるれときこゆ
へきかたもなしなみくの人ならは
こそあらめらかにもひきがなく
らめたれたに人のあまたしらんは
いとをしるへき見さわきてした

「3ウ

(六九頁9行目～13行目)

ることなれはなか／＼いとなしたる
いとうたてなりけるおのつからきた
まうやうもあらむあなかに
すきかましき心とはさらにならぬ
をさるへきにやしふかくあはめ
られたてまつるもいとわりなう
ことわりなるにみつからもあやし
きまでなんとまめたちてもす
へくよろつにの給へといとはつかし
けにたくひなき御けはいのいよく／＼

「4オ

(七〇頁8行目～12行目)

かめれとなをいとわか／＼しきこ
こちしはへるはうつゝともおもふ給
へられすこそかすならぬみなから
かうおほしくたしける御心のほと
はいかゝわあさましうとおもふ給へし
らさらんいとかうやうなるきはく
きはとこそはへなれとておしたち
給へるなさけなさおうしとおもへ
るもけにいとをしうはつかしけな
れはそのきはくも又おもひしらぬう

「4ウ

(七〇頁3行目～8行目)

なくさまいとあはれけなりあなか
ちに心くるしうはあらねとみさら
ましかはたさう／＼しからましとおほす
なくさめかたうおもへれはなとかううとま
しき物にはおほすへきおもむきさまなる
おこそちきりありとはおもひない給らめ
むけによをしらぬけしきにおほされ
たるけしきなんいにつらきことうら
みられていとかううきみのほとなさ
たまらぬありしなからにてかゝる御

「5オ

(七二頁2行目～7行目)

うちとけきこえんもはつかしければ
すくよかに心つきなしとはみへたて
まつるともさるかたにいふかひなくて
もすくしてむと心つようおもひな

してつれなくもてなすひとほ上の
たをやかなるにつよい心をしひ
てくはへたれはなよたけの心ちして
さすかにをくへくもあらずふしこと
に心やましうてあやにくけなる
心さまをいふかひなしとおもひて

「5ウ

(七〇頁12行目〜七一頁2行目)

心くるしうおほしやるすくれたることは
なけれどめやすくもみえつるにな、
このしなつなからくまなうみあつむる
人のいひしことは、けにとおほしあは
せられてにしおもてのかうしいそきあけつ
るけはるもさるかたにゆかしかりけり
このころはとのにのみおはすなをかの人
のうちたへておもふらんこと御心にかゝりて
くるしきをおほしわひてきのかみをめ
したりかのありしとう中納言こゝに

「6オ

(七三頁5行目〜9行目)

ほとにみへ給へるみにしむはかりにお
もふつるすき心とも、あへか一ヶ月はあり
あけにてかけをさまれる物からかほやさか
に見えてなか／＼おかしきあとやほのなりな
に心もなくそらのけしきもたゝみるひと
からとのみゑんにも見ゆるなりけり人しれぬ
御心にはいとむねいたくかへりみかちにていて
給てとのにかへりおはしてもとみにまところま
れ給はす又あひみるへきかたなきをあ
はれにこの人のおもふらんことはましていかならんと

「6ウ

(七二頁13行目〜七三頁5行目)

こゆる人そかしまことによしやとのたまはす
れはこともなくはへるへしいともてはなれう
と／＼しうはへれは世れいにてなむむつひ
はへらぬときこゆさてかのこきみは
五六はかりありてゐてまいれりこまや
かにおかしきことはなけれとなまめき
あてなる人とみえたりめしいれていとな
つかしうかたらひ給へはわらは心ちに
いとうれしとおもふあねきみの御ことの
いとくはしうとひ給へはわらは心ちにさる

「7オ

(七三頁14行目〜七四頁7行目)

ゑさせようだけにみへしおみにちかう
つかふひとにせんうへにもわれたてまつらん
との給へはいとかしこきおほせ事にはへり
かのあねなる人にいひはへらんと申にも
むねつふれ給へとつれなくてその

あねきみはあそこのおと、やもたれた
るさもはへらすこの二三ねんこそかくても
しはへれをやのおきてにあらすところ
ゆかぬやうになんき、たまふすときこ
ゆれはあはれのことやはむたしからすき

「7ウ
(七三頁9行目〜14行目)

みしゆめをあふよありやとなけく
まにめさへあはてそひころ(も)へにけるぬる
よなければなといとめとまりぬへき御かき
さまなれとみいれられすめもきりて
心えかたきみのすぐせうさそひたり
けるをおもひつ、けうちふし給へり又
のひそのきみをめしたれはまいるとて
御かへりこへはか、す御ふみみわくへうも
あらずときこえよといへはうちわらひて
たかふへくもあらずの給はせしをいか、

「8オ
(七四頁10行目〜14行目)

へきふし／＼はいくゑきこゑ給いとはつ
かしければうちいてにく、おほさるれと
いとよくかたらひたまひて御ふみかき
給あやしとおもふにこま／＼とみ、にあて、
いひしらせ給か、ることこそはといとおもひ
かけかたれとおさな心ちふかうもたと
らすもてきたれはおんなむねつふれて
あさましきになみたもおちぬこののおも
ふらんこともはつかしうてさすかに御ふみを
おかくしにひきひろけたりいとおほくて

「8ウ
(七四頁7行目〜9行目)

ましきなめりとの給にかほうちあかめて
いつらとの給にしか／＼なんはらたちたちはへ
るときこゆれは心のことやとて又もたまへ
りあこはゑしらしなそのいよのおきな
とものさきよりみたまつりそめし
ひとそされとたのもしけなくひほ
そとふつつかなるこ、ろてこしつき
ゑりまうけ給へるそかしきみは
あかこにてあれよかのをやはたのもし
けなれとゆくさきみしか、めりなと

「9オ
(七五頁5行目〜9行目)

さはきこゑむといふお心やましくて
のこりなうの給きかせけるとおもふに

つらきことかきりなしいておよすけたること

はいはぬ物そさはなたまはりそとけしき

あしければめすにはいかゝとてまいりぬかの

みすいたる心ちにこのまゝは、のありさま

をよにめてたしとおもひてついせう

しよるころなれはこきみわはくる

まにてゐてありくこきみめしよせて

きのふはまちくらししてやみにきあひおもふ

「七四頁14行目〜七五頁5行目」

「9ウ」

てなとはおもひきこえぬにしもあらね
とをかしきさまをみえたてまつりて

なにゝなるへきみそとおもひかへす

なりけりきみもおほしおこたるお

りもなくこひしきよりも心くるし

うおもへりしさまをおほしわたる

かるくしくはひまきれてたちより

たまはんにも人めしけゝなれはす

きくしきふるまひやあらはれんとは

はとさまかうさまにおほしくらす

「10オ」
(七六頁2行目〜7行目)

の給へはさもありけんいみしかりけること
とおもへるもおかしとおもほす又御ふみ

も給へりされとこのこもいとはかなし

心よりほかにちりもせはかるくしき

なさへそへむみのありさまをいとつ

きなくおほえてめてたきひとなり

ともわかみこそと思へはいとすきかま

しきことのふさはしからぬうちとけ

たるけはゐもきこゑすほのかな

りし御けはひなとおけによになへ」
「10ウ」

(七五頁9行目〜七六頁2行目)

橋姫

らまし事にの給ふものをきこゑはけま

して御心はけまひたてまつらんとおほひ

てのとやかなるゆふくれにすひり「まいり」給へりれい

のさまなる御ものかたりきこゑかわし

給ふついてにうちのみこの御事きこ

ゑいてゝみし「あ」か月のありさまなとくは

しうのたまひいてたるに宮いとせちに

をかしとおほいたりされはよと御けしきを

みいてゝいとゝ御心うこきぬへくいひつゝけ

給ふさてその返事有けんは何かみせ給」
「9オ」

(二五三三頁4行目〜9行目)

もてなひ給はんも中／＼うたてあらむ
れいのわか人に、ぬこゝろはへなんめる
をなからむのちもなとひと事うち
ほのめかしてしかはさやうにて心そ
とめたらんなどのたまひけり御みつ
からもさま／＼の御とふらひ野山の
いはやにあまりし事などの給ゆり「けり」
りまうてんと思しすおもひて三宮の
かやうにをくまりたらんあたりのみ
まさりせんこそをかしかりけれとあ
「9ウ

(一五三二頁14行目～一五三三頁4行目)

やまさとめいたるくまさなどにをのつ
から侍らんめりこのきこゑさすわたりはいと
よつかぬひしりさまにてこち／＼しうそ
あらんととしころ思あなつりてみゝをた
にこそとゝめさりつればのかなりし月
つきかけのみを「と」りせすはまをならむ「む」はや
けはいありさまはさはかりならんをそあ
らまほしき程と思給へ侍へきなときこゑ
たまえははて／＼はまめたちていとね
た／＼おほろけのひとに心ゆるさぬ人の
「10オ

(一五三四頁1行目～6行目)

みせ給はさりしまろならましかはとうらみ給ふ
さかしいとさま／＼に御らんすへかんめるはし
をたにそみせさせ給はぬかのわたりはいとむ
しんにうもれたるみにか引こめてやむ
へきけはひにも侍らねはかならず御らんせさ
せはやと思給れといかてかはたつねよらせ給へき
かやすき程こそすかまほしくはいとよくて
すきぬへきよにて侍れかくろえおほかめ
る哉さるかたにみところありぬへき女もの
をものはしくうちしのひたるすみかとも
「10ウ

(一五三三頁9行目～一五三四頁1行目)

事／＼しれいのをとろ／＼しきひし
り事はみはてゝしかなとてわらひ
給ふこゝろのうちにはかのふる人のほのめ
かしゝすちななどのいとゝをとろかさ
れてもものあはれなるにをかしとみる事
もめやすしときくあたりにも何はかり
こゝろにもとまらさりけり十月になりて
五六日程にうちへまうて給ふあし
ろをこそこのころは御らんせめとき
こゆる人／＼あれと何かそのひを
「11オ

(一五三四頁11行目～一五三五頁2行目)

かくふかく思へるをろかならずゆかしうを
ほす事かきりなくなり給ぬなをまたくよく
けしきみ給と人をすゝめ給てかきり
ある身の程よたけさをいとわしきまで
心もとなしとおほいたればへをかしうていてやうなき
てぞ侍しはし世中にとゝめしと思給
ふるやある身にてなをさり事もつゝま
しきなりもしこゝろなからかなは
ぬこゝろつきそめなはおほきにた
かふへき事ときこゑ給へはいてあな

「11ウ

(一五三四頁6行目ゝ11行目)

してきなどいはせ給ふうちもまところ
ますかはか風のいとあらましきに
木葉のちりかふをとみつのひゝきな
とあはれもすきてものをそろしく
心ほそき所のさまなりあけかたちかく
なりぬらんと思ほとにありしゝのゝ
め思いてられてきんねのあはれなる
事のついてつくりいてゝさきのたひ
きりにまとはされ侍しあけほのにい
とめつらしきものゝねひとこゑきゝ給し

「12オ

(一五三五頁6行目ゝ11行目)

んしにあらそふ身にてあしろにもよら
むとそきゝすてたまふてれいのし
のひやかにいてたちたまかひてかる
らかにあしろくるまにてかとりのを
しさしぬきぬはせて事さらにき給
へり宮まちよろこひ給て所につけ
たるおほんあるしなとをかしうし
なし給にくれぬれば御とのあふらちかく
てさきくゝみさし給つるふみともの
ふかきなどあさりもさうしをろ

「12ウ

(一五三五頁2行目ゝ6行目)

給へられされけり御事のひゝきから
にやとこそおもひしかとて心とけ
てもかきたて給はすいてあなさかなや
しか御みゝとまるはかりのてなとは
いつくよりかこゝまてはつたはりこんある
ましき御事なりとてきむかきな
らし給へるいとあはれに心すこし
かたえはみね松風のもてはやすな
るへしいとたとくゝしけにおほめ
き給てこゝろはへあひて人はかり

「13オ

(一五三六頁2行目ゝ7行目)

のこりなん中くゆかしくあかすおもふ
たまへらるゝなんと申給ふいろをも
かをもおもひすてゝし後むかしきゝし
事もみなわすれてなとのたまへと
人めしてきんとりよせいとつきな
くなりたりやしるへする物ゝねに
つけてなん思いてらるへかんめりけりと
てひわめしてまら人にぞゝちの「かし
たまふとりてしらへ給ふさらにほの
かにきゝ給しをなしものとも思」13ウ

(一五三六頁11行目く一五三六頁2行目)

たまえと思よらさりしは人ことをき
き給けんたにあるものをいと
たはならむひきいりつゝみなき
給はすたひくそゝのかしきこゑ
たまえとゝかくきこゑすさひて
やみ給ぬれはいとくちをしうおほ
ゆそのついでにもゆあやしうよつ
かぬおもひやりにてすくすありさま
ともにおもひのほかなる事なとはつ
かしうおほいたりひとにたにいかて

「14オ

(一五三六頁11行目く一五三七頁2行目)

にてやめたまひぬこのわたりにを
ほえなくてをりくほのめくさうの
ことこそゝろえたるにやときくを
りはんへられとみゝとめてなんともあ
らてひさしうなりけりやこゝろにま
かせてをのくかきならすへかんめるをか
はなみはかりやうちあはすらんろ
なうものゝよふにすはかりのひやうし
なともとまらしとなんおほえ侍とて
かきならし給へとあなたにきこゑ「14ウ

(一五三六頁7行目く一五三七頁11行目)

思給ふるしはしもなからへ侍らんのち
の程はひと事もかくうちいてきこゑ
させてんさまをたかえ侍まし
くなんなむと申給へはいとうれし
き事とおほしのたまふさて
あか月かたに宮の御をこなひし給
ほとにかのをい人めしいてゝあい給へ
りひめ君の御うしろみにてさふら
はせ給ふ弁の君とそいひけるとしは
六十にすこしたらぬほとなれとみや

「15オ

(一五三七頁6行目く一五三七頁10行目)

しられしとはく、みすぐせとけふあ
すともしらぬ身ののこりなさにさ
すかにゆくすへとをき人はおちあふ
れてさすらへん事これのみこそけ

によをはなれんきわのほたしなり
けれとうちかたらひたまえは心
くるしうみたてまつり給わさ

との給うしろみたちはかゝし
きすちには侍らすともうとくし
からすおほしきこゑさせんとなん

「15ウ

(一五三七頁2行目〜6行目)

かたりをおほえぬついてにき、つけ
つらんとおほすになみたと、めかたかり
けりさてかくそのよの心しりたる人もの
こり給へりけるをめつらかにもはつかし
うもおほゆる事のすちになんかくつ
たふるたくひやまたもあらんとし
ころかけてもき、をよはすなんあり
けるとの給へはこ侍従と弁とをはなれて
またしる人侍しひと事にてもま
た事人にうちまねひ侍らすかく

「16オ

(一五三八頁1行目〜6行目)

ひかにゆへあるけはひしてものなと
きこゆこ権大納言君よと、ともにものふ思
つ、やまひつきはかなくなり給にしありさ
まをきこゑいて、なく事かきりなしけによ
そのひとのうへときかたにもあはれなる
へきふる事をましてとしこおほつかな
くゆかしういかなりけん事のはしめ
にかと仏にもこの事をさたかにしらせ給
へとねんしつるしるしにやかく
ゆめのやうにあはれなるむかし

「16ウ

(一五三七頁10行目〜一五三八頁1行目)

なくいふせく思給へわたりいかにし
てかはきこしめしつたふへきと
はかゝしからぬねんすのついでにも
おもひたへつるを仏はよにをはしけり
となん思給へしりぬる御らむせ
さすへきものもはんへりいまはなにかは
やきもすて侍なりかくあさゆふの
きえをしらぬ身のうちすて侍なは
をち、るやうもこそといとうしろ
めたなく思給ふれとはこの宮わたりにも

「17オ

(一五三八頁11行目〜一五三九頁2行目)

もはかなくかすならぬ身のほとに侍と
夜ひるかの御かけにつきて侍しかは
をのつからもの、けしきをみたてま
つりそめしに御心よりあまりて

おほしけるときくた、二人の中に
なんとまさかに御せうそのかよひ
も侍しかたわらいたければくはし
うきこゑさせすいまはのとちめに
なり給ていさ、かのだひをく事の
侍しをかゝる身のをきところ

「17ウ

(一五三八頁6行目～11行目)

かさねかなしき事思給しほとに
としころよからぬ人の心つけたり
けるか人とくはかりこちてにしのうみのはて
までとりもてまかりにしかはその事さへ
あとたえてその人もかしこにてうせ
侍にしのちと、せあまりになりてなん
あらぬよのこ、ちしてまかりのほりたり
しをこの宮はち、かたにつけてわら
はよりまひりかよふゆへ侍しかはいまは
かういとよにましらふへきさまにも

「18オ

(一五三九頁6行目～11行目)

ときくほのめせ給ふをまちいて給し
たてまつりしかはすこしたのもしう
かゝるをりもやとねんしはりつるち
からいてまうてきてなんさらにこれは
このよの事にもはへらすしとなくく
いとこまやかにむまれ給ける程の
事もよくおほえつ、きこゆむなし
うなり給しさはきには、に侍し人は
やかてやまひつきて程もへすかくれ侍
にしかはいと思給へしつみふちころもたち

「18ウ

(一五三九頁2行目～6行目)

めくらひ侍れなときこゆる程にれ
いのあけはてぬよしさらはこのむか
しものかたりはつきすへくなんあら
ぬこ、ちしけるをまた人きかぬ
こゝろやすき所にてきこゑ侍らすとそ
いひし人はほのかにおほゆるをいつ、
むつばかりなりしほとにやありけん
にはかにむねやみてうせにきとなん
かゝるたいめんなくはつみをもきみにて
すきぬへかりける事などの給ふ

「19オ

(一五四〇頁2行目～6行目)

侍らぬをれんせい院の女御の御方なとこそはむかしきゝなれたてまつ

りしあたりにまいりよるへく侍し

かとはしたなくおほえ侍てえ

さしいて侍らてみやまかくれのくちき

となりて侍なりこ侍従はいつかうせ

侍にけんそのかみわかさかりとみ侍し

人かすすくなくなり侍にけるすゑ

のよにおほくの人にをくるゝいのち

をかなしく思給へてこそさすかに」19ウ

(一五三九頁11行目ゝ一五四〇頁2行目)

思たまふるときこゆつれなくてこれは

かくいたまひつかやうのふる人とはすかた

りにやあやしき事のためしにいひいつ

らんとくるしうおほせとかへすゝおもゝ

らさぬかよしをちかひつるさもやと又

思みたれ給に御かゆこはいゝなどまいり

給ふ昨日はいとまひなりしをけふ

うちの御物いみもあきぬらん院に女一

宮なやみたまふ御とふらひにかならずま

いるへければかたゝいとまなく侍をまたこの」20オ

(一五四〇頁11行目ゝ一五四一頁2行目)

さゝやかにをしまきあはせたるほん
ことものかひくさきをふくろにぬい
いたるとりいてゝたてまつる御まへ
にてうしなはせ給へ我なをいゝく

へくもなりなりとのたまひはせて
この御文をとりあつめたまはせ給
たりしかはこ侍従に又あひみ侍ら
むついてにもたかにつたへまひらせ
んと思給へしをやかてわかれ侍にし
もわたくし事にはあかすかなしう」20ウ

(一五四〇頁6行目ゝ11行目)

宿木

おもひをきけるほとのかなしさ

あくまでふるめきたれとゆへなく

はあらぬをそいさゝかなくさめにはおほし

ける宮にもみちたてまつれはおとこ

みやおはしましけるほとなりけりみなみ

の宮よりとてなに心もなくもてまい

りたるを女君れいのむつかしき事

もそとくるしうおほせととりかく

すへきことかは宮をかきつたかなと

たゝならすの給てめしよせて〈み〉給御」1オ

(一七六四頁9行目ゝ14行目)

みちをふみわけけるあともみえぬを
いたしてとみにもえいて給はすいとけし
きあるみ山木にやとりたるつたの
いろそまたのこりたるこたになとひ
きとらせ給て宮へとおほしてもたせ
給

やとりきとおもひいてすは木のもとの

たひねもいかにさひしからまし

とひとり給をきゝてあまきみ

あれはつるくちきのもとをやとりきと

「1ウ

(二七六四頁三行目〜九行目)

さもやありつらん女君はことなきを
うれしと思給にあなか「ち」にかくの給
をわりなしとおほしてうちえんして
ゐ給へる御さまよろつのつみゆるしつ
へくをかし返事書給へみしやとて
ほかさまへみむき給へりあまえてかゝさら
むもあやしければ山里の御ありき
のうらやましくも侍かなかしこは
けにさやうにてこそよくと思給しを
ことさらに又いはほの中もとめん

「2オ

(二七六五頁5行目〜9行目)

文には日ころなに事かおはしますらん
山さにとものし侍ていとゝみねのあさき
りにまとひ侍つるほどの御物かたりとも
みつからなかしこのしむてんたう
になすへきことあさりにいひつけ侍にき
御ゆるし侍てこそはほかにうつすことも
ものし給侍らめ弁のあまにさるへき
おほせ事はつかはせなんとそあるよくも
つれなく書給へるふみかなまろあり
とそきゝつ覧との給もすこしはけに

「2ウ

(二七六四頁14行目〜二七六五頁5行目)

かなけにうちなひきたるなとれ
いの事なれと夕風なをあはれなり
かし

ほにいてぬ物をおもふとしのすゝき

まねくたもとのつゆしけくして

なつかしきほと御そともなをし

はかりき給てひわひき給へりわうし

きてうのかきあはせをいとあはれに

ひきなし給へは女君も心にいり給へる

事にて物えんしもえし「はて」給はすちゐ

「3オ

(二七六五頁14行目〜二七六六頁5行目)

よりはあらしはつましく思侍しをい
かにもさるへきさまになさせ給は、
おろかならずなときこえ給かくに
くきけしきもなき御むつひなめ

りとみ給ながら我が御心ならひにた、
ならしとおほすかやすからぬなるへし
かれ／＼なるせんさいの中におはなの
物よりゆ「こ」とま「に」さしいて、まねくおかしく
みゆるにまたほにいてさしたる
もつゆをつらぬきとむるたまをは「3ウ

(二七六五頁9行目～14行目)

た、ならてうらめしきなめり
きくのまたよくもうつろひはて、
わさとつくろひたてさせ給へるは
またいとをそきに如何なるひとも
とにかあらんいとみところありてうつろ
ひたるをとりわきをらせ給て花の
中にひとへにとすんし給てなにか
しの御子のこのはなめてたる
ゆふへそかしいにしへ天人のかけ
りてひわのてをしへたるはなに「4オ

(二七六六頁10行目～14行目)

さき御几帳のつまよりけうそくに
よりかゝりてほのかにさしいて給へる
いとみまほしくらうたけなり

あきはつる野辺のけしきもしのすゝき
ほのめく風につけてこそしれ
我身ひとつのとてなみたくなる、
かさすかにはつかしき「け」れはあふきをま
きはしておはする心のうちもらうたく
をしはからるかゝるそは人もえ思
はなたさらめとうたかはしきかた「4ウ

(二七六六頁5行目～10行目)

し給しかとはか／＼しくひきもとめ
すなりにし物をとて、もふれ給
はねはかくはかりの事もへたて給
つるこそ心うけれこのころみるわたり
はまたいと心とくへきほとにもあらね
とかたなりなることをもかくさす
こそあれすへて女はやはらかに心うつ
くしきかよき事とこそこの中納言
もさたむれれかの君にはたつゝ、み
給てこよなき中なめれはなとまめ「5オ

(二七六七頁4行目～9行目)

事もあさくなりたるよは物う
しやとて御ことをしやり給をくち
おしとおほして心こそあさくもあらめ
むかしをつたへかたんことさへはなとて
かさしもとておほつ「か」なきてなど
をゆかしけにおほしたればさらは
ひとりことはさうくしきにさし
らへし給へかして人めしてさ
うのこと、りよせてひかせたてまつり
給へとむかしこそまねふ人も、の」5ウ

(二七六六頁14行目～4行目)

らひ給へくもあらさりし年ころの
御すまゐを又かへりなまほしけに
おほしの給はするこそいと心うけれ
なとた、いひにいへはわかき人くは
あなかまやなとせいす御事ともを
しへたてまつりなとして二三日もり
おはして御物いみなと事つけ給を
かの殿にはうらめしくおほして
おと、うちよりいて給けるま、に
こ、にまいり給へは宮ことくしけ

」6オ

(二七六七頁14行目～一七六八頁5行目)

やかにうらみられてそうちなきて
すこししらせ給ゆるひたりければ
はんしきてうにてかきあはせつま
おとをかしきこゆ伊勢の「海」うたひ
給御こゑのあてにをかしきを女
はら物、うしろにちかつきまいりてゑ
みひろけてあたりふた所をはし
ますはつられとそれもことはりな
れは我御まへをはいはる人とこそ
は申さめか、る御あたりにまし」6ウ

(二七六七頁9行目～14行目)

ならふへくもあらぬそくしいたかり
ける人くのそきてみたてまつりて
さもきよらにをはしけるをと、かな
さはかりいづれともなくわかくさかりにて
きよけにをはさうする御ことものに
に給へきもなかりけるあなめてたやと
いふもあり又さはかりやむことなま「け」なる
御さまにてわさと御むかへにまいり給
へるこそ「に」くけれやすけなの世中やと
うちなけくもあるへし御みつからも」7オ

(二七六八頁9行目～14行目)

なるさましてなににいましつ
るそとむつかり給へとあなたにわた
りてたいめんし給ことなる事なき
ほとはこの院をみてひさしくなり
はへるもあはれにこそなとむかしの御
物かたりすこしきこえ給てやかてひ
きつれきこえ給ていて給ぬ御ことも
のとはらさらぬかむたちめ殿
上人なともいとおほくひきつゝき
給へりいきをひこちたきをみるに

「7ウ

(二七六八頁5行目ゝ9行目)

させ給いといたうわつらひ給へはきさき
の宮よりも御とふらひありかくてみと
せになりぬれとひと、ころの御心さし
こそをろかならねおほかたの世には物く
しくすも、てなしきこえさりつる
をこのをりそいつくにもくきこしめし
おとろきて御とふらひとも人もきこえ
ける中納言の君は宮のおほしさはく
にもおとらしいかにせんとなきて心
くるしうしろめたくおほさる

「8オ

(二七六九頁5行目ゝ10行目)

きしかたを思いつるよりはしめかの
はなやかなる御ながらひに「たち」ましるへく
もあらずかす「か」なる物をといよく心ほそ
ければ猶心やすくこもりなんのみこそめや
すからめなといとおもふ「ほえ」給はかなくて年
もくれぬ正月つこもりかたよりれいな
らぬさまになやみ給を宮来「また」御らんし
しらぬ事にていかならんとおほしなけき
てみすほうなと所くにててもこゝにても
あまたせさせ給に又はしめそへ

「8ウ

(二七六八頁14行目ゝ一七六九頁5行目)

こと、もいとかきりなしやかてそのほとに
まいり給へきやうにありければおと「二」かたにも
心つかひし給ころなれとれいの事な
れはそなたさまには心もいらてこの御事
のみにとをしくなけるべきさきさきの
ついたちころになをし物とかいふことに
権大納言になり給て左大将かけ給つ右
大殿、ひたりになり給てかへ給へる所也
けりよろこひに所々あり「き」給てこの
宮にもまいり給へりいとくるしう

「9オ

(二七七〇頁1行目ゝ6行目)

れとかきりある御とふらひはかりこそ
あれあまりもえまうてたまはてしのひて
御いのりともせさせ給ける女宮の御
もきた、このころになりて世中ひ、

きの、しるよろつのことた、みかとの
御心ひとつなるやうにおほしいそきて
御うしろみなきしもこそ中／＼めて
たけにみえける女御のしをき給へること
をはさる物にてつくもとところさへ所さ
るへきす両ともなと、り／＼につかまつる

「九ウ
(一七六九頁10行目～一七七〇頁1行目)

ま、にて六条院にてなんありける
ゑかのみこたちかむたちめたいき
やうにおとらすあまりもとかしきま
てなんつとひ給けるこのみやもわた
り給てしつ心なければいそきかへり給
ぬるを大殿、御かたにはいとあかす
めさましと(へ)給おとるへうあらぬ御程
なるをた、いまおほえのはなやかさに
おほしをこりてをしたち「も」てなし
給へるなめりかしからうしてそのあ

「10オ
(一七七〇頁11行目～一七七二頁2行目)

し給へはこなたにおはしますほとに成
けりやかてまいり給へり僧などさふらひて
ひんなきかたにとをとろき給て

あさやかなる御なをしなとたてまつ
りかくてひきつくろひておもてた
ふのはいし給へる御さまもととり／＼に
いとめてたしやかてこよひ官の人に
ろく給あるところにさうしたてまつ
り給をなやみ給人によりてそおほし
たゆたふめる左大臣殿、し給ける

「10ウ
(一七七〇頁6行目～11行目)

の御まへのつかさね甘ちこの御そ
いつへかさねて御むつきなとこそこ
と／＼しからすしなし給へれとこまかに
みればわさとめなれぬ心はへなとみ
えける宮の御前にもせかうのをしき
たかつきともにてふすくまいらせ給へ
り女かたの中にはつかさねはさる
ものにてひわりこ冊さま／＼しつく
したること、もおほかりひとめこと
そことしくはとことさらにしなし

「11オ
(一七七二頁7行目～12行目)

かつきおとこにてむまれ給へりける
を宮もかひありておほしたり大將殿
もよへおはしましたりしかしこま

りにやかてこの御よろこひもうちそへて

たちなからまいり給へりかくこもりを
はしませはまいり給はぬ人なし御うふ

やしなぬ三日はれいのたゝ宮の

御わたくしことにて五日のよは大將殿
よりとき五十くかゆらてのことにわう
はんなどはよのつねのやうにてこもち

「11ウ

(二七七二頁2行目〜7行目)

ところあれは御このきむたちなど
まいり給てすへいと思事なけにめ
てたければ御みつかからも月ころものを
もはしく心地のなやましきにつけ
ても心ほそくおほしわたりつるに
かくおもたゝしくいかめしきことゝ
ものおほかれはすこしなくさめ
もやし給らん大將殿はかくさへをと
なひはて給めれはいとゝ我かたさまは
けとをくやならんまた宮の御心

「12オ

(二七七二頁2行目〜7行目)

給はぬなりけり七日の夜はきさいの
宮の御うふやしなるなれはまいり
給人／＼いとをほかり宮の大夫をはし
めてかむたちめ殿上人かすしら
すたうちあそひのゝしるうちにも

きこしめして宮のはしめておと

なひ給なるにはいかてかはとの給はせて

御はかしたてまつらせ給へり九日も大

殿よりつかまつらせ給へりよろしからす

おほすあたりなれと宮のおほさん 「12ウ

(二七七二頁12行目〜二七七二頁2行目)

手習

そひゐてあつかひきこえ給ある人／＼も

あたらしきさまかたちをみれは心をつく

してそをしみまもりける心にはなを

いかてしなむとのみぞ思わたり給へとさはか

りにていきとまりたる人のいのちなれは

いとしうねくてやう／＼かしらもたけ

たまへは物まいりなとし給にそ中／＼おも

やせもてゆくいつしかとうれしく思き

こゆるにあまになし給てよさてのみ

なんいくやうもあるへきとの給へはいとをし 「1オ

(二〇〇二頁3行目〜8行目)

みえつらむとはつかしくついにかくいき
かへりにけるかと思ひみしく、ちをし
ければいみしうおほえて中／＼しつみ給へ
りつるひころはうつくし心もなきさまに
て物いさ、かまいるをりもありつるを
露はかりのゆをたにまいらしいかなれば
かくたのもしけなくのみおはするそうち
はへぬるみなとし給へりつる事はさめ
給てさはやかにみえ給へれはうれしと
おもひきこゆるをとなく／＼たゆむ折なく

「1ウ

(二〇〇一頁12行目～二〇〇二頁3行目)

いたくもみたれすときはてたれはつや／＼と
けうら也一とせたらぬつくもかみおほかる
所にてめもあやにいみしき天人のあま
くたるをみたらむやうに思あやうき心地
すれとなとかいと心うくかはかりいみしく
思きこゆるに御こゝろを、きてはみえ給いつ
こにたれときこえし人のさる所にはいかで
おらせしそとせめてとふをいとはつかしと
思てあやしかりし程にみなわすれたるにや
あらむありけんさまもさらにおほえ侍らす

「2オ

(二〇〇二頁13行目～二〇〇三頁5行目)

けなる御さまをいかでかさはなしたて
まつらむとてたゝいたゝき斗をそきて
五かいをうけさせたてまつる心もとなけれと
もとよりをれ／＼しき人のこゝろにてえさかしう
しゐてもの給はすそうつはいまはかはかり
いたはりやすめたてまつり給へといひをき
てのほり給ぬゆめのやうなる人を見たて
まつるかなとあま君はよろこひてせめて
おこしすゑ御くしてつからけつり給さはか
りあさましくひきゆいてうちやりたりつれと

「2ウ

(二〇〇二頁8行目～13行目)

ひめをみつたりけんたけとりのをきな
よりもめつらしき心地するにいかなる物、
ひまにきえうせんとすらんとしつ心なくそ
おほしけるこのあるしもあてなる人なり
けりむすめのあまきみはかたたちめの
きたのかたにてありけるかその人なく
なり給てのちむすめたゝひとりをいみし
うかしつきてよきゝむたちをこにして
いみしうかしつき思あつかひけるをそのむ
すめの君なくなりには心うしいみしと

「3オ

(二〇〇三頁10行目～二〇〇四頁1行目)

た、ほのかに思いつる事こそはた、いかてかこのよにあらしと思てゆふくれことにはしちかくてなかめし程にまへちかくおほきなる木のもとより人のいてきてゐてし行心

地なんせしそれよりほかの事は我ながらたれともえ思いてられ侍らすといとらうたけにいひなして世中にありけりとはいかて人にしられしき、つくる人もあらは

いといみしくこそとてなき給あまりとふをはくるしとおほしたればえとはすかくや

「3ウ

(二〇〇三頁5行目〜10行目)

山さとりはみつのおともなこやか也つ

くりさまゆへある所のこたちおもしろくせんさいなともをかしうゆへをつくしたりあきになりゆけはそら

のけはひあはれなるにとたのいねかるとて所につけたるものまねひしつゝわかき女ともはうたうたひけうしあへりひたいきならすをとなどもをかしみしあつまちの事なんとも思いてられてかのゆふきりの宮す所の

「4オ

(二〇〇四頁6行目〜10行目)

思いりてかたちをもかへかゝる山さとははすみはしめたるなりけりよと、もにこひわたる人のかたみにもおもひよそへつへからむひとをたにみいて、しかなとつれく心ほそきまゝに思なけきけるをかくおほえぬ人のかたちけはひもまさりさまなるをえたれはうつゝの事ともおほえすあやしなからうれしと思ねひにたれといときよけによしありてありさまもあてはかなりむかしの

「4ウ

(二〇〇四頁1行目〜6行目)

しけんいつこにかあらむ我よにある

物とはいかてかはしらんをなしこゝろなる人もなかりしまゝによろつへたつることなくかたらひみたれたりし右近なとも折々思いてらるわかき人のかゝる山さとにいまはとたへこもるはかたきわさなりければたゝいたくとしへにけるあま七八人そたかへのてにてはありけるそれかむすめまこやうの

物とも京に宮つかえするもことさまにて

「5オ

(二〇〇五頁12行目〜二〇〇六頁2行目)

うたよみにしへ思いてつゝさまく
物かたりなとするにいらふへきかたも
なければつくくとうちなかめて

我かくてうきよの中にめくるとも

たれかはしらむ月の宮こにいまは
かきりと思はてゝし程は恋しき人
おほかりしかとことひとくはさしも思
てられすたゝをやいかにまとひ給けん
めのとのよろつにいかて人なみくになさ
むと思ひられしをいかにあえなき心地

(二〇〇五頁7行目〜12行目)

「5ウ

みし宮ことりにゝたることなし何事に
つけてもよの中にあらぬ所はこれにやと
そかつは思なされけるかくのみひとに
しられしとしのひ給へはまことに
わつらはしかるへきゆへあるへき人にも
ものし給らむとてくはしきことある
人くにもしらせすあま君のむかしの
むこのきみいまは中将にておはしけるか
おとうとのせんしのきみそうつのもとには
物し給ける山こもりしたるとふらひに

「6オ

(二〇〇六頁7行目〜12行目)

あるも時々そかよひけるかやうの人に
つけてみしあたりにゆきかよひ

よにありけりとたれくにもきこえたて
まつらむ事いみしうはつかしかるへし
いかなるさまにてさすらへけんと思
やりのよつかすあやしかるへきを思へ
はかゝる人くにかけてもみえすたゝし
しうこもきとてあま君のわか人に
したりけるふたりをのみそこの御かたに
いひわきたるみめも心さまもむかし

(二〇〇六頁3行目〜7行目)

「6ウ

御こゝろはえもよになひかせ給はさりけ
りとおろかならす思給へしらるゝ折
おほくなといふ人くにすいはんなどやうの
物くはせ君にもはすのみなどやうの
ものいたしたれはなれにしあたりにて
さやうの物もつゝみなき心地してむら
さめのふりいつるにとゝめて物かた
りしめやかにし給いふかひなくなり
にし人よりもこのきみの心はえなと
のいと思やうなりしをよその物に思なし

「7オ

(二〇〇七頁14行目〜二〇〇八頁4行目)

うちわすれすやみ侍らぬをかつはあやしく
思給へるなどの給へは心のうちあはれにすぎ
にしかたの事も思給へわすれぬをあな
ちにすみはなれかほなる御ありさまにお
こたりつゝ山こもりもうらやましくつねに
いてたち侍を、なしくはなとしたいまとはる、
人くゝにさまたけらるゝやうに侍てなんけふは
みなはふきすてゝものし給との給山こも
りの御うらやみは中くゝいまやうたちたる
御ものまなひなんむかしを、ほしわすれぬ

「7ウ

(二〇〇七頁8行目ゝ13行目)

かはりてあやしくもあるかなと思へは
こはくゝしくいらゝきたる物ともき給へる
しもいとをかしきすかた也御まへなる人くゝ
も故ひめ君のおはしましたる心地のみ
し侍に中将殿をさへみたてまつれば
いとあはれにこそおなしくはむかしのさ
まにておはしまさせはやいとよき御よ
はひならむかしといひあへるをあないみ
しやよにありていかにもくゝ人にみえん
こそそれにつけてむかしの事思いてらる

「8オ

(二〇〇八頁10行目ゝ二〇〇九頁1行目)

たるなんいとかなしきなとかわすれ
かたみをたにとゝめ給はすなりにけん
と恋しのふる心也ければたまさかにかく物
し給へるにつけてもめつらしくあはれに
おほゆへかめるとはすかたりもしいてす
ひめきみはわれはわれと思いつる方おほ
くてなかめいたし給へるさまいとうつく
しゝろき一えのいとなさけなくあさや
きたるにやひかりもみえすぐろきをきせ
たてまつりてかゝる事ともみしには

「8ウ

(二〇〇八頁4行目ゝ10行目)

かのはうのつまいりつるほと風のさはか
しかりつるさはきにすたれのひま
よりなへてのさまにはあるましか
りつる人のうちたれかみのみえつるは
よをそむき給へるあたりにたれそと
なんみおとろかれつるとの給ひめ君の
たちいて給へりつるうしろてをみたて
まつりてなめりと思てましてこまか
にみせたらはと心とまり給なんかし昔
の人はこよなくおとり給へりしをたに

「9オ

(二〇〇九頁6行目ゝ10行目)

へきさやうの事すちは思たえてんかし
わすれなんと思あま君のいり給へるまゝに
まらうとあめのけしきをみわつらひて

少将といひし人のこゑをきゝしりて

よひよせ給へりむかしみし人ゝはみなこゝに

物せらるらむやと思なからもかうまいりく

る事もかたくなりたるを心あさき

にやたれもゝみなし給らむなどの給

つかふまつりなれにし人にてあはれ

なるむかしの事とも思いてたるついでに

「二〇〇九頁1行目ゝ6行目」

9ウ

めしてんとのみいへはうちとけにとひたつ
ねむもさまあしきこゝちしてあめも

やみ日もくれぬへしといふにそゝのかさ

れていて給まへちかき女郎花を、

りてなにしをふらむとくちすさひて

ひとりこちたてり人の物いひを

さすかにおほしとかむるこそなとこ

たいのひとゝもは物めてをしあへり

いときよけにあらまほしくもねひ

まさり給にけるかなとおなしくは

「二〇一〇頁1行目ゝ6行目」

10オ

いまたわすれかたくし給めるをと心ひと

つに思てすきにし御事をわすれかた

くさめたまふめりしにおほえぬ人を

えたてまつり給てあけくれみ物に思き

こえ給めるをうちとけ給へる御ありさま

をいかて御覧しつらむといふかゝる事

こそありけれとをかしくてなに人な

らんけにいとをしかりつとほのかなり

つるを中ゝおもひいつこまかにとへと

そのまゝにもしはすをのつからきこし

「二〇〇九頁10行目ゝ二〇一〇頁1行目」

10ウ

中ゝみ所まさりてこゝろくるしかるへきを

しのひたるさまに猶かたらひとりてんと思へ

はまめやかにかたらふよのつねのさまには

おほしはゝかる事もありけんをかゝるさ

まになり給へたるなん心やすきこえ

つへく侍さやうにをしへきこえ給へきし

かたのわすれかたくてかやうにもまいり

くるを又いまひとへ心さしをそへてこそ

などの給いとゆくすえうしろめたく心ほそく

みゆる有様に侍めるにまめやかなるさまに

「二〇三九頁3行目ゝ9行目」

11オ

我したらんあやまちのやうにをしうかなしく
くやしければつゝ、みもあえす物くるを
しきまでけはひもきこえぬへければ
のきぬかはかりのさましたる人をうし
なひてたつねぬ人もありけんやまた
その人かの人むすめなんゆくへもし
らすうせにたるまたもえんししてよ
をそむきけるなどをのつからかくれる
へきをなどあやしう返々思あまりても
かゝるさましたらん人はうたでもおほえし

「11ウ

(二〇三八頁12行目～二〇三九頁3行目)

給し故宮の御むすめにかよひ給
しをまつひと、ころはひと、せうせ給て
その御おと、又しのひてすゑたて
まつり給へりけるをこそ春又うせ
給にければそのわさせさせ給
はん事かのてらのりしになんさるへき
事の給はせてなにかしもかの女の
御さうそくひとくたりてうし侍へき
をさせ給てたまひてむやをらす
へき物はいそかせ侍なんといふをきくに

「12オ

(二〇四二頁12行目～二〇四三頁2行目)

事のみまさりてなんひたちはいとひ
さしくおとつれきこえ給はさんめり
えまちつけ給ましきさまになんみえ給
とのたまふに我やのなとあいなくみゝとま
るに又いふやうまかりのほりてひころに
なり侍ぬるを、ほやけことのいとしく
むつかしくのみ侍にわつらひてなん昨日
も候はんと思給しを大將殿のうちに
おはせし御ともにつかふまつりてこ八
の宮のすみ給し所におはして日くらし

「12ウ

(二〇四二頁7行目～12行目)

〔付記〕本研究は、国文学研究資料館共同研究「相愛大学「春曙文庫」

に関する研究―書物と人」および、JSPS 科研費（課題番号：

22KJ2183）および、JSPS 科研費（課題番号：22KJ2185）

の助成を受けた研究成果の一部である。

（いいだ・みか 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研
究員／かわぶち・すずか 本学博士後期課程・日本学術振興
会特別研究員）